
コーンポタージュな男

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コーンポタージユな男

【Nコード】

N8441Z

【作者名】

ごほんライス

【あらすじ】

オレが一番嫌いなラブな話を書いてしまった。いよいよ歳だな…。

松山健作には密かな楽しみがある。職場の自販機にあるコーンポタージュを飲むことである。ささやかな楽しみではある。人から見たらつまらない楽しみかもわからん。しかし、健作は、コーンポタージュを飲むことによって、「よし。がんばるぞ」という気になるので、コーンポタージュというのも大したものだ。

しかし、悲劇は訪れた。健作は昨晚、小説を書いていた。それがそもそも失敗だった。

職場でゴっつ眠かった。うっかり、コーンポタージュを大事な書類の横に置いて作業をしてしまったのだ。つまりは、肘で当てて、書類の上にこぼしてしまったわけである。普段ならこんなミスしない。

「あわわわわ。えらいことだ」

単なる書類ならコピーをとればいい。しかし、その書類には、天皇陛下の直筆のサインがしてあったのである。

そもそも、なぜ、そんな大事な書類を健作に渡したのか、そして健作が机の上に置きっぱなしにしておいたのか、謎は多いが、ともかくも、そうなってしまったのだ。

課長にむちゃくちゃ怒られた。健作はすっかり落ち込んでしまった。

もうコーンポタージュなんて飲むものかと決心した。

しかし、また翌日になれば飲んでいた。そんなものだ。コンポタージュを飲まないとあまりに陰鬱で自殺してしまうわけである。会社でのミスを防ぐより、自殺を防ぐ方が大事である。

しかし、本当の悲劇がついに起こった。自販機のレイアウトが変わり、コンポタージュがリストから外されてしまったのだ。

「!!!!!!!!!!!!!!」

健作は悲しくて悲しくて、家に帰って、スーパーで買ったカップ

のコンポタージユを飲んだ。

「だめだ。全然楽しくない。会社で飲むから旨く感じるのだ」

健作は水筒にコンポタージユを入れて持ってこうかと思っただが、そんな面倒なことはしたくない。

健作は悩んでしまう。仕事でこんなに悩んだことなかったのに……。

健作が物憂げな顔をしてると、パートのおねえさんがやってきた。綾瀬はるか似の若い子だ。

健作は女の子とはあまり話さないのどきつとしてしまう。健作はサラリーマンをやっているが実はプロ作家になるという夢も持っており、それになるまでは女子と付き合うのを禁止としたのだ。

「松山さん。元気ないですね。どうされたんですか」

「はあ」

健作は、バカにされると思って黙っていた。

「よほど重要な事情が……」

パートのおねえさんは、勘違いしてる。その逆だよ！ と健作は心の中で叫ぶ。

「わかった。課長に相談してみる」

「え！」

パートさんは課長のところに走っていった。

健作はヘンな汗が出る。

健作の席へ課長がおもむろにやってきた。

「健ちゃん。悩みは一人で考えたらだめだ。いいなさい。オレたちはチームだ」

健作はますます黙ってしまふ。

「よほど重要な悩みだな。こうなったら部長に相談してみるか」
「待ってください！」

健作は叫んでしまった。

「そんなんじゃないんです……！」

二人は目を白黒させている。

健作は恥ずかしかつたが事が大きくなる前に、仕方なく本当のことを話した。

「あつははは。なにそれえ。バカみたい」

「笑わないでくださいよ！ けっこうマジなんだから！」

「オレは女のことかと思つたよ。美智子ちゃん、かわいいものな」
「え」

「健ちゃんのやつ。美智子ちゃんのこと好きなんだよ」

「え。え。え」

健作は心の中で、課長のバカーーーーと叫ぶ。

パートさん、いやめんどくさい、美智子は、顔が真っ赤になつてしまふ。

「はっははは。まさか、美智子ちゃんまで健作のこと好きだったとか、そんなアホな話ないよね」

美智子は黙つて、顔がますます真っ赤になつてしまふ。

健作も美智子の意外な反応にびっくりして口が聞けない。

「課長のバカ！ あほ！ はげ！」

「なにい」

美智子は走つていつてしまつた。

課長ははげと言われて落ち込んだ。

「健ちゃん。何ぼうとしてる。男はこういつ時追いかけるもんだよ。いけ」

「し、しかし課長。今から仕事を」

「業務命令だ。だいたい美智子ちゃんもおらんと仕事はできん。走るんだ」

「は、はい！」

健作は、ドアを飛び出した。

「屋上かな」

健作は、屋上のドアが開いていたので入る。やっぱり、美智子が立っていた。

「村上さん……」

「松山さん……」

美智子が目をうるうるさせている。

「ごめん……」

「松山さん！ そんなにコンポタージュ好きなら、あたしが明日から毎日持ってきてあげよう！」

「え」

「いや??？」

「そんなことない。嬉しい！ お願いします」

「わかりすた」

「かんでるよ」

「ほんとだ。あは」

「うふふふ」

笑い声が青空に吸い込まれた。

なんと、翌日、美智子は、コンポタージュの入った水筒のほかに弁当も作ってきてくれたのだ。

「ケガの巧妙だな……」

「なあに」

「いや何でもない。このトカゲのから揚げおいしいね」

「うれしい。パパがアジアで捕獲してきたの」

何ヶ月かして、また自販機にコンポタージュが復活。けど、もう健作は買わなかった。

美智子と結婚していたのである。

「自販機はオレの神様」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8441z/>

コーンポタージュな男

2011年12月26日18時48分発行